



撮影：川村 喜一

31年目のごあいさつを
申し上げます

館長 山崎ちづ子

山と自然の文芸誌「アルプ」の愛読者だった山崎猛が開設した北のアルプ美術館は、昨年6月に30周年を迎え、一般社団法人として再出発しました。これもひとえにいつも支えてくださっている皆様のお陰と感謝申し上げます。

しかし、昨年は2月にロシアによるウクライナ侵攻があり、4月は知床で観光船が沈没。20名の方が亡くなり今も6名の方が行方不明になっているという悲しい事故がありました。美術館の上空を飛び交うヘリコプターの音を耳にすると折らずにいられない日々で、斜里の町が悲しみに包まれたようでした。そのような中で迎えた6月。かねてより「緑風」は30年は変えずに発行すると決めておりました。今回、31号の発行に当たり、より読みやすく美術館の今を伝えたいとリニューアル致しました。これからもよろしくお願ひ致します。

ボランティア募集中です！

当館のサポートをしてくださるボランティアを随時募集中です。1日だけのお手伝いでもOK！展示替えや収藏品リスト作成、データ入力など様々な活動がありますので、関心のある方はお気軽にお電話（0152-23-4000）下さい。

2022年の振り返り

3月2日 開館
6月1日 山の文芸誌「アルプ」300号展（開催中）、尾崎喜八生誕130年展（12月18日）
8月11日 開館30周年記念交流イベント「アルプの夕べ」
10月15～31日 しれとこハロウィン
10月16日 奈良絵本講 演会（講師・工藤早弓）
11月30日 北のアルプ美術館30年の歩み展
12月17日 第2回本と音（主催・流水文庫シリエトク、Airda）
12月18日 仕事納め
12月19日 大掃除（ボランティア参加者7名）

2023企画展のお知らせ「大谷一良展－山からのおくりもの－」

会期 2023年6月14日(水)～11月30日(木)



上段左
「山の玩具箱」(1994年)
上段中央
「一日の終り」(1999年)
上段右
「わたすげ」(2002年)

下段左
「アルプ」表紙絵を担当
(1958年～1983年)
下段右
大谷さんの愛用道具

外国の山を見ているような、幼い頃の遠い記憶の中の山のような。そして一歩一歩、足を運んだ山道でひっそりと咲いている小さな生命！。

大谷さんの絵は、いつも静かに空想の世界に誘ってくれます。飄々とした風情の中、時に見せる真剣なまなざしは、版画に描かれる小さな生命へのまなざしと同じようでした。

「アルプ」の編集委員だった大谷さんは、同誌の表紙絵を多く描いていました。多忙な海外勤務の中でも締切りは必ず守っていたそうです。近年では洋菓子メーカーの「きのとや」のパッケージに版画作品が起用され、アルプファンのみならず、多くの方々に知られるようになりました。

本展では、作品のほか筆やパレン（版画の刷り道具）など、愛用の道具や、貴重な限定本も展示いたします。大谷一良さんの版画の世界をぜひご覧ください。大谷さんのご家族のご協力のもと、展示販売も行います。この機会に作品をお手元に置いていただけましたら幸いです。

大谷一良プロフィール

1933年東京都出身。57年東京外国語大学スペイン語科卒業。総合商社勤務を経て、96年よりフリーの版画家。畦地梅太郎に私淑。「アルプ」をはじめ「山と溪谷」「岳人」など山岳関連図書の表紙画やカットを多く手掛ける。著書に「山のかけら」「山の絵葉書」、共著に「山のABC」など。2014年死去。



「館長から見た「大谷さん」」

バードウォッチングが趣味だったのに、鳥の版画は一枚も見たことがありません。大谷さんの鳥、見たかったなあ。



寄稿① 申田さんと尾崎の往復書簡

石黒 敦彦《神奈川県鎌倉市/詩人・尾崎喜八生誕130年記念事業代表》

昨年来、鎌倉文学館・北のアルプ美術館・東京の杉並区立郷土博物館の順番で、雑誌アルプを申田孫一さんとともに創刊した詩人・尾崎喜八の生誕130年を記念する展覧会が開かれました。

尾崎の孫である私は「尾崎喜八生誕130年記念事業」として展示の指導・監修に当たらせていただきましたが、北のアルプ美術館の「尾崎喜八 生誕130年展」の、敗戦後から昭和30年まで申田さんからいただいた葉書・書簡の展覧は感慨深いものでした。

これらの手紙は、一昨年急逝された山崎猛前館長と寄贈をお約束したものでした。私が尾崎家の最後になるので、尾崎喜八の遺品の整理を急いでいるので、700枚余の昭和初期の乾板写真や原稿類は杉並に寄贈し、斜里には上記の申田さんの書簡を託そうとお願いしたのです。

申田さんからの来信は、尾崎の戦後の富士見時代（昭和27年まで）と上野毛時代のもので、21世紀の今では、昭和の文学史の

貴重な資料となることは疑いありません。その主な内容は「自然とともにある文学」の可能性を巡るやりとりで、アルプの前身として重要な詩誌「アルピレオ」、創文社との関わり、雑誌「アルプ」の創刊に至る構想のやりとり、申田さんの細心の配慮で「尾崎喜八詩文集」の刊行の気運が作られていく過程などが描かれています。

決定的に重要なのはアルプの構想を巡る中で申田さんが尾崎の手紙に込めて「科学ではなく博物誌なのです」と書かれています。この構想を芯にして、山の文学誌の体裁をとった新しい博物誌と文学の雑誌が、20世紀後半の日本で奇跡的に生まれた瞬間といえます。その特色ゆえに、アルプは東京から遠く離れた道東の山崎猛さんをはじめ多くの山岳愛好家、ナチュラリスト、環境と文化を守ろうとする人々の精神の支えとなっていたのでしよう。この2人の手紙を、ぜひ書籍として形にできれば、と願ってやみません。

寄稿② 山と牛のこと

富田 美穂《小清水町/木版画家》

ハイキングくらしいの軽い気持ちで入部した武蔵野美大ワンゲル部は、冬山こそ登らないものの、そこそこ本格的な山岳部だった。

大きなザックに山の道具を詰め込んで、日本アルプスや屋久島、大雪山などを歩いた。早朝、山小屋からピークを目指すとき、高山植物におちた朝露の雫に視線を落としながら一歩一歩登った先に広がっていた見たことのない広大な眺め、その広大さの中に自分もまた内包されているのだという感覚、そういうものが確実に私の価値観を塗り替えていったように思う。

しかし私は山を描こうという気持ちにはどうしてもならなかったのだ。山で見た景色は私にとっては大きすぎて、とても描き切れるものではないと感じた。

もっと身近なものを丁寧に描写しよう。ひとつひとつ在るものを見つめて描くことが、きつと山で見た大きなものにもつながるはず。結果徐々に私は自画像を描くようになった。

そして、屋久島登山の資金を

稼ぐため、大学2年と3年の間の冬、北海道の牧場で住み込みのアルバイトをしたのが運のつきだった。そこで私は牛に出会ってしまった。描くべきものがここにあると思った。

大きく強い身体に優しい瞳を持ち、私たちの食べ物でもある彼女たち。私は毎日牛の生産物に生かされながら牛の事を知らなすぎると感じたし、牛を描く事が私なりの命や自然に対するけじめのような気がした。

それから20年。牛の木版画を作りながら斜里町の隣町、小清水に住んで16年になる。私はまだ制作の、長い長い縦走の途中のような気がしている。

最後に、故山崎猛館長との思い出。山崎さんには折に触れ本当にたくさんの事を教えて頂き、その生きる姿勢が憧れだった。ある冬の寒い日の夕暮れ時、以久科原生花園の前を通りかかり、きつと流水がきれいだろうと海岸に寄ってみたら、カメラを携えた山崎さんに偶然出会ったこと。薄紫色に染まった流水に呼ばれて、海岸で邂逅したあの日をきつと忘れないだろう。

Book

館内で販売中の
書籍をご紹介します

北のアルプ美術館
30周年記念誌



開館30周年事業として記念誌を発行しました。これまでの当館の歴史などを振り返り、30年の感謝と「アルプ」の世界観を伝える内容となっています。1冊2,000円で館内で販売中です。通信販売も承っています。

Goods

館内で販売中の
グッズをご紹介します

オリジナル
クリアファイルを
つくりました



当美術館のオリジナルグッズとして、A4クリアファイルをつくりました。6月から作品展を行う大谷一良さんが描いた「雪の斜里岳」をあしらいました。1枚400円で館内で販売中です。

Alp Museum



Information

Event

地域の仲間と
楽しく活動！

当美術館を
活用して
みませんか？



小規模なワークショップや講演会、読書会など、当美術館を地域活動や交流の場として活用してみませんか？ 館内の一部や、敷地内「アルプの林」などをご利用いただけます。お気軽にご相談ください。

Nature

美術館敷地内の
「アルプの林」から

いたずら者の
アカゲラさん



アカゲラはアルプの林でも1年を通して比較的よく見られる野鳥ですが、建物をつつく困り者もいて山岳文庫の軒下に6箇所も穴が開けられ修繕。彼らも悪気があるやっっているのではないでしょうけれど…。

編集後記

今年の冬は雪が少なく、雪かきもちよっとだけ楽をさせてもらったような気がします。雪解けとともに美術館の庭にいつの間にか福寿草が開花しているのを見。植えた覚えはないので虫たちが花粉を運んできたのでしょうか？

その後、ご近所の方から福寿草の株をいただき庭に植え替え、新しい春の花が仲間入りしました。

さて今号からリニューアルした「緑風」をご覧になつていかがでしたか？ご感想をぜひお寄せください。(上美谷)

アルプ基金・寄付金 報告

2022年4月1日から、2023年3月31日まで、671,268円となっております。30周年記念事業の展示制作と記念誌制作に活用させていただきました。ご協力、ご支援に心より感謝とお礼を申し上げます。

公式サイト



北のアルプ美術館

北海道斜里郡斜里町朝日町11-2
TEL.0152-23-4000 <http://www.alp-museum.org>

夏期(6月~10月) 10:00~17:00 冬期(11月~5月) 10:00~16:00
月・火曜日 休館(12月~翌年2月末は冬期休館)

北のアルプ美術館たより「緑風」No.31

2023年5月発行

編集：山崎ちづ子/上美谷和代

印刷：㈱斜里印刷